

アルツハイマー病 四半世紀におよぶ創薬の物語

ノンフィクション作家 下山 進

- *病気の進行は遅らせるが…
- *世界に広がる承認
- *治験から外される理由
- *それは北極圏の街で始まった
- *アミロイド・カスケード・セオリー
- *「レカネマブ」とエーザイ
- *内藤晴夫の捨てる決断
- *アルツハイマー征服はまだ1合目
- *グローバル・ネットワークの重要性
- *遺伝病の人々の苦悩



山縣 それでは開会いたします。（拍手）

本日は『アルツハイマー征服』というご本をお書きになりましたノンフィクション作家の下山進さんにお越しいただきました。

下山さんは大学卒業の後、文藝春秋に入られ、主にノンフィクションの分野で活躍され、最後はノンフィクション部門の責任者をなさいました。たぶん皆さんがご存じの本もいくつか企画、編集されていて、たとえばファイナンシャル・タイムズのジリアン・テットが書いた『サイロ・エフェクト』、それから船橋洋一さんが書かれた『カウントダウン・メルトダウン』、こういう本は下山さんが企画をされて世に出した本であります。

在職中の2002年に『勝負の分かれ目』、こ

れもノンフィクションで、ご自分で書かれたのですが、その当時私はこれを読ませていただいて、非常に迫力のあるノンフィクションで、作家になればいいのにと思っていたんですけれども、そのまま文春の中でほかの人の本をつくっておられた。文春を辞められたら、さすがにやはり自分で作家になられて、いろんな作品を書いていらっしゃる方です。

『アルツハイマー征服』は非常に長い時間をかけて取材されています。コロンビア大学のジャーナリズムスクールというのはジョセフ・ピユリッツァーがつくったスクールですが、下山さんはそこでフェローとして Advanced International Reporting Program を修了されています。英語が非常にできるんですけれども、この